第1　渡島管内の概況

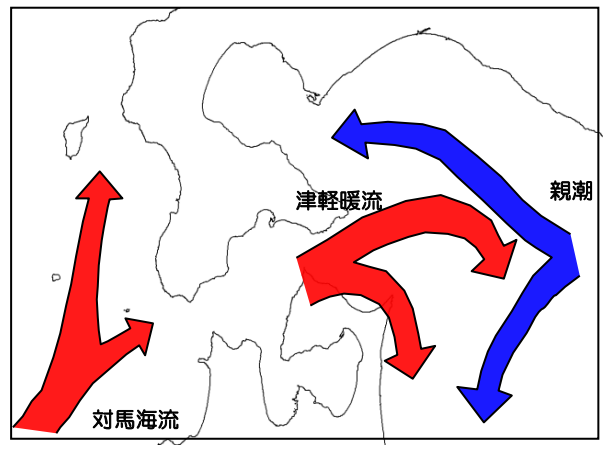
1．管内の概況

渡島管内は、北海道南西部、渡島半島に位置し、日本海、津軽海峡及び太平洋・噴火湾の3つの海域に面しており、南西端の松前町から北端の長万部町までの429.6kmに及ぶ非常に長い海岸線を有しています。
総面積は3,937.5k㎡で全道の4.7%を占め、長崎県（約4,132k㎡）に匹敵する広さです。2市、9町からなり、人口は405,651人と全道の7.6%を占めています。

市町村名	人口（人）	世帯数（戸）	総面積（km²）	海岸線(km)	備　考
松前町	7,793	3,571	293.3	73.2	
福島町	4,347	2,039	187.3	33.1	
知内町	4,583	2,003	196.8	19.0	
木古内町	4,431	2,140	221.9	15.7	
北斗市	47,181	18,508	397.4	20.4	H18.2.1合併（上磯町、大野町）
函館市	265,503	123,950	677.9	124.7	H16.12.1合併（函館市、戸井町、恵山町、椴法華村、南茅部町）
鹿部町	4,082	1,660	110.6	14.8	
森町	16,255	6,628	368.8	34.8	H17.4.1合併（森町、砂原町）
八雲町	17,277	7,523	956.1	55.7	H17.10.1合併（八雲町、熊石町）
長万部町	5,625	2,685	310.8	38.2	
七飯町	28,574	11,141	216.8	—	
合　計	405,651	181,848	3,937.5	429.6	

出典：住民基本台帳（平成29年1月1日現在）、平成27年国勢調査、国土交通省水管理・国土保全局編「海岸統計（平成23年版）」
国土交通省国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調（平成28年10月1日現在）」

2．水産業の概況



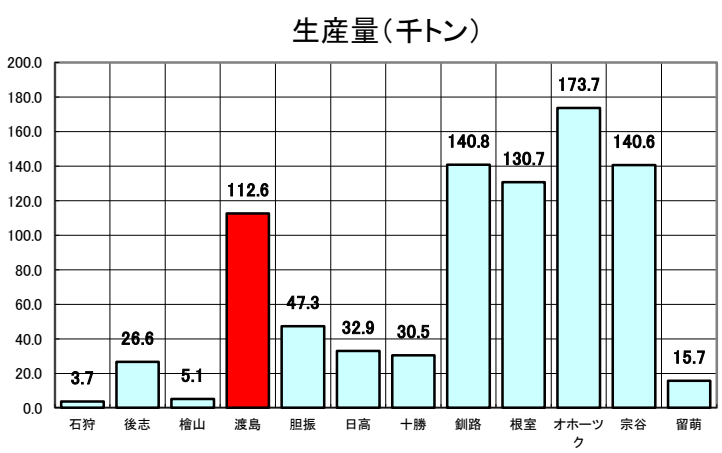
渡島管内では、日本海側は対馬海流（暖流）が北上し、その一部は津軽海峡を経て太平洋側に達します。また、太平洋側は、栄養豊富な親潮（寒流）が北から流入します。特に、暖流と寒流の混じり合う海域は魚の餌となるプランクトンが多く発生する好漁場となっています。

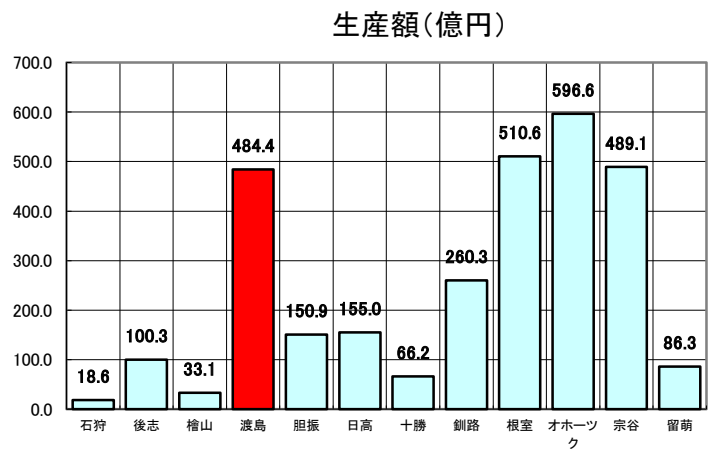
日本海側では、うに・あわび等の採介藻漁業、いか釣り漁業、まぐろ一本釣り漁業など、津軽海峡から太平洋側では、こんぶ漁業・養殖業、まぐろ延縄漁業、各種刺し網漁業や定置網漁業など、噴火湾では、ほたてがい養殖業、かれい刺し網漁業、えびかご漁業など、海域ごとに多種多様な漁業が行われています。

平成28年の漁業生産高は、生産量は112.6千tで全道（859.9千t）の13.1%、生産額は484.4億円で全道（2,951.4億円）の16.4%を占め、道内有数の漁業生産地域となっています。

近年は、資源水準の低迷などから漁業生産高は減少傾向にあり、漁業就業者の減少や高齢化が進んでいます。こうした中、振興局では、適切な資源管理や育てる漁業の推進、地域水産物の消費拡大や付加価値の向上、担い手の育成などの取組みを進めています。

【振興局別漁業生産高（平成28年）】





出典：北海道水産林務部「北海道水産現勢」

３　トピックス　平成２９年を振り返って

○　台風 18 号による漁業被害（9 月）

9 月 18 日に管内を通過した台風 18 号により、噴火湾地区のホタテガイ養殖施設や太平洋地区の定置網などが大きな被害を受けました。

被害の内訳は、ホタテガイの脱落・流出が 3,400 トンで約 9 億 3 千万円、ホタテガイ養殖施設の破損が 348 台で約 4 億円、定置網の破損が 63 統で約 4 億 9 千万円などであり、合計 562 カ所、約 18 億 5 千万円の被害総額になりました。

振興局では、「地域づくり総合交付金」を活用して、ホタテガイ養殖施設の強靭化を図ったほか、「海岸漂着物等地域対策推進事業」を活用して、漁港に堆積した漂着物の処理への支援を行うなどの対策を講じました。

○　北朝鮮船員による松前小島漁港内施設の被害（11 月）

12 月上旬、松前沖の小島漁港内にある松前さくら漁協や函館海上保安部、北海道所有の漁業関連施設等の備品が盗まれたり、設備の損壊等の被害が確認されました。

その後の調べにより、道警は、北朝鮮船籍の木造船の船長ほか 3 名を道有財産である発電機等の窃盗容疑で逮捕しました。

漁協では、松前町などの支援を受けて施設を復旧することとしており、また、振興局においては、岩海苔の採取など漁労作業への影響を考慮し、平成 30 年 3 月に発電機の復旧を完了させました。

○　過去 2 番目に低い漁業生産量（12 月）

平成 29 年（1 ～ 12 月）における振興局管内の漁業生産高（速報値）は、数量が 95 千トン、金額が 391 億円となり、前年をそれぞれ 15 %、19 %下回る見込みとなりました。

特に、数量は、現在の統計を取り始めた昭和 33 年以降、昭和 40 年の 86 千トンに次いで過去 2 番目に低い数値となる見込みです。

魚種別では、管内の主要魚種であるホタテガイが、台風による被害や稚貝の斃死などにより、数量が 26 千トン、金額が 107 億円と前年と比較してほぼ半減し、斃死により記録的な不漁であった昭和 56 年以来の大減産となりました。

また、スルメイカは、記録的不漁であった前年をさらに 3 %下回る 9 千トン、54 億円と低い水準の漁獲実績でありました。

一方、コンブは、養殖コンブの増産により、前年を 6 %上回る 4.4 千トン、マイワシが全国的な資源増により、前年の 10 倍の 13 千トン、スケトウダラが来遊に適した水温であったため、前年の 1.6 倍の 12 千トンでありました。